
相想草 - あいおもいぐさ -

神音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

相想草 - あいおもいぐさ -

【Nコード】

N7944C

【作者名】

神音

【あらすじ】

真面目、優等生、ガリ勉、いい人、そんな代名詞を持つ平凡な男子生徒、斉藤瞬也。そして、そんな瞬也のクラスメイトで、大人しく、目立たない女子生徒の秋村凜。この二人の共通点は、お酒を飲んだり、煙草を吸ったり、実はそう真面目でもないということ。二人の出会いは突然で、そして凄く些細なことだった。けれどその分、二人の別れも突然で、そして凄く在り来りな、凜の転校ということだった。

一番必要だったもの、いつもどこかで捨ててきた。

言葉を作るだけならば、どんな綺麗事だって簡単に言うことが出来た。笑顔を見せるだけならば、どんな辛いときだって簡単に笑顔を見せびらかした。

例えば、クラスの中でも大嫌いなソイツが明日死んだら、同情だとしても、僕はやっぱり泣くのかな？

分からないのに、分かったつもりでいて。知っているのに、知らない振りをし続けて。己を傷つけて、何かを得たつもりでいた。

本当は、人一倍臆病なだけ。

「斉藤、これ頼めるか？」

「はい。いいですよ」

そう言つて、ヅラという愛称の松本先生からプリントの束を受取ったのは放課後。三時半頃だったかな。

チクタク、チクタクと。ひとりだけの静かな教室に、時計の針の音は良く響いた。

見る理由もないから、時計に目をやることはなかったけれど、もう五時を過ぎているはずだ。少しずつだけれど、太陽の日差しが赤く教室を燃やしているのが、感覚で分かったから。

残りのプリントの枚数は、三分の一といったところだろう。

プリントの整理、と一言で言つても、五分もかからずに簡単に終わるときと、こうやって何時間かかるときがあるのは知っていたはずなのに、引き受けたのは僕。

学級代表でも何でもないので、任せたのは松本先生。

僕は一度手の動きを止めて、椅子に座ったまま少し背伸びをした。プリントの整理を任せられるのはこれが初めてではなかった。

真面目、優等生、ガリ勉、いい人。

これらが僕の代名詞だということは、小学校入学当初から、高校

受験を半年後に控えた今でも変わらない。と僕は勝手に予想している。

割りと気に入っている黒の学生鞆の中には、やたらと分厚い教科書やノート、辞書なんかと一緒に、ごく自然と入っているお気に入りの煙草とライター。

それをそつと手にとって、何事もないように一服する教室の中の僕。

どう？ 驚いた？ 二重人格、とでも言ってやろうか。

ばれることに恐れはなかった。それはそれで、楽になれると思ったから。

灰色の煙が僕の口から二酸化炭素とともに吐き出された。

煙草の匂いは、心安らかになるようで、好きだった。この薬、体には悪いらしいが、僕の心には良く効くみたいだ。

赤い日差しと風と一緒に入ってくる、運動部の元気の良かけ声が、心底邪魔だと思い、吐いた溜息。そんな心汚い溜息は、風にさらわれて、どこか遠くへ飛ばされてしまったようだ。

十五分ほど、煙草の匂いに酔いしれ、気分転換した僕は、スッキリとした頭で残りのプリントへと手を使った。

全ての整理が終わり、教室を出たとき、時刻は既に六時を軽くまわっていた。

きちんと整理されたプリントの束を職員室に持っていくが、既に松本先生は帰っていたようだ。綺麗に片付けられた松本先生の机が一番初めに目に飛び込んだ。

小さな溜息を吐いたあと、松本先生の机上にプリントの束を置き去りにして、僕は帰ることにした。

空はもう赤くもなく、ただ、薄暗い闇が広がっていた。あと十分もすれば、この薄暗さもなくなつて、ただの闇となり、電灯が光りだすのだろう。

上靴から靴に履き替えていると、自分の傍らを人が通った。

誰だかは分からないけれど、スカートだということが分かったか

ら女子。きつい化粧の匂いがしないことから、派手な五月蠅い奴らではないということも分かった。それから、すぐ近くの下駄箱に手をかけたところから見ると、同じクラスの女子らしい。

「斉藤君、バイバイ」

「あ、うん。バイバイ」

彼女から声をかけられて視線を向け、やっと正体が分かった。

同じクラスの秋村凜さんだ。

予想どおり、休み時間は読書をするような、大人しく、クラスでも目立たない真面目な女子。

頼まれたことは断れないタイプらしく、良く誰かの手伝いをしてりしているが、その裏で何を考えているかは今ひとつ掴めない子だ。秋村さんは、僕に小さく手を振りながら別れの挨拶を告げたあと、僕よりも一足先に校門を出て行った。

僕も、その後を追うように校門を出る。

家の方向が同じらしく、秋村さんの姿は、まだ小さく僕の目に入るが、追いかけて一緒に帰ろう、だなんて僕は言わない。

ただ、小さいまま、同じ大きさの秋村さんを、見つめることもなく、気にしないでいると、その後姿はいつの間になくなっていった。彼女がどこに住んでいるかは知らないが、小学校が違ったから、僕の近くの家でないということは確かだ。どこかの曲がり角で曲がったか、この辺の家かなのだろう。

そんな彼女と今後の僕に、繋がりが生まれるなんて、このときは予測できなかった。

秋村さんと関わるきっかけは、とても些細なことだった。

その日、どうしても眠気に耐え切れなくなった僕は、授業中に、気分が悪いと教室を出た。

例えば、僕が成績も悪く、先生に対しても反抗的な態度をとっていて、髪を染めたり、制服を着崩したりしていたら話は別だけれど、生憎、僕はこの中のどれかひとつにも当てはまることはなく、すんなりと先生をパスできた。それどころか、大丈夫か、と心配の

言葉をかけてもらえるほど。

いつもの優等生らしい微笑みで、大丈夫ですよ、と言ったあと、僕は、保健室へ向かう振りをして非常階段へと向かった。

僕の学校の非常階段は、誰にも注目してもらえない、かわいそうな非常階段だ。もはや、避難訓練のときさえ使用されていないところを見ると、全く存在意味のない非常階段となっているようだ。

けれど、その代わりに、知る人ぞ知る絶好のサボリ場所だった。

他の階は知らないけれど、昼休みなど、僕はいつも、教室がある階の四階から三階へと下に続く、『この場所』でくつろいでいた。

ちなみに、この中学に入学してから約二年半。毎日のように昼休みを『この場所』で過ごし、過去に数回この非常階段でサボったことがあるが、一度も誰かと出くわしたことはなかった。

「あれ？ 斉藤君」

だから、凄く驚いたんだよ、『この場所』に人がいたことに。

その声は、僕が非常階段に辿り着いてすぐに聞こえた。

聞いたことがある声。なんともいえない、透き通っているような、ひんやりした声。そうだ、この声は確か。

「もしかして、斉藤君もサボリ？」

僕がこれから降りようとしていた非常階段には、秋村さんの笑顔。いつもよりもずっと明るい笑顔に見えるのは、気のせいじゃないはずだ。

「……秋村さん？」

「驚いちゃったな。だって、斉藤瞬也君って凄く真面目な子だと思っていたんだもの。でも、なんだか興味沸いた、斉藤君に」

良く見れば、秋村さんの右手にはチューハイの缶。

「驚いたって、こっちの台詞。確か、僕のクラスの秋村凜さんは朝のショートホームルームのとき、腹痛で保健室に行ったことになっているんだけど。アルコールを飲んでいるところを見ると、確実に腹痛でないことは確かみたいだね」

僕は一步、また一步と階段をゆっくり降りて、彼女に近づいてい

く。

そして、秋村さんよりも、二つ上の段差で僕は座り込んだ。

「あ、斉藤君も一口どう？ 初めて買った新発売の商品だけど、なかなかいけるよ」

秋村さんはそう言っ僕に巨峰味のチューハイを勧める。アルコールは嫌いじゃないけれど、甘いチューハイはあまり好まない。

「遠慮しとくよ。僕はこっちの方が好きだから」

先ほど鞆の中からこっそり取り出して、学ランのポケットに入れた煙草とライターを彼女に見せびらかすと、秋村さんはクスクスと笑った。

「そっか」

授業中、四階から三階へと下に行く、非常階段の『この場所』には、煙草を吸う僕。その二段下には、チューハイを飲む秋村さん。

他のクラスメイトたちは、この景色を見てどんなことを感じるのだろう。猫かぶり、二重人格、と罵るだろうか。それとも俺にも煙草頂戴、なんて笑顔を見せるだろうか。

いずれにせよ、今の僕には分からないことだった。

「その煙草、好きなの？」

「お気に入りなんだ」

「私は嫌いだな、その煙草。苦いんだもの」

その苦さがいいんだよ。その苦さが美味いんだよ。と言いたいところだが、好みは人それぞれ。強要するようなことはないから、口には出さなかった。

「私は、甘い煙草が好き」

「僕は苦いほうが好きだ」

会話はそこでストップした。

僕は酷い眠気に負け、煙草を消して眠ることにした。

昼休み開始のチャイムで目を覚ましたとき、秋村さんの姿はなく、少しの安心感を覚えた。

彼女が嫌いなわけではないけれど、なんとなく、彼女といると落

ち着かなかった。それは、悪い意味でもあり、良い意味でもある。さすがにお腹が減っていて、僕は自分の教室に向かった。非常階段から出たあとで、もう一本煙草を吸ってからにすれば良かったと少しだけ後悔した。

昼休みの教室は騒がしくてあまり好きではないが、残念なことに、朝コンビニで買ったサンドイッチは、教室の、僕の机の横にかかっている鞆の中に入っている。誰にもばれないような小さな溜息を吐いたあとで、教室に入った。

秋村さんは、いつもの静かな微笑を零しながら、伊藤朋子さんとお弁当と食べていた。

伊藤さんは、秋村さんと同じく大人しく目立たない女子だ。ただ、決定的に秋村さんと違うのは、伊藤さんは純粹に大人しく、真面目な女の子だということ。サボりは勿論、酒や煙草なんてもつてのほかだろう。

僕は秋村さんをチラリと見たあと、目もあわせずに教室から出て、非常階段へと後戻りした。

さっきも言ったように、昼休みは基本的にここにいるのが、僕の日常。

四月までは誰かに一緒にお弁当を食べないかと誘われたりもしたが、悉く断り続けた結果がこれだ。

男子とはいえ、やはりグループというものは当たり前存在する中、僕はどのグループにも入っていなかった。僕の中で、誰と一番仲がいいとか、どのグループに入りたいといった感情は、一切なかったのだ。

皆同じで、仲がいいわけではないが、悪いわけでもない。好きではないが、嫌いでもない。皆平等な存在。

僕にとって、クラスメイトの中に友達と呼べる存在はいないが、これといって嫌われているわけでもないし、いじめられているわけでもない。その微妙な位置が、僕はどんな人気者の位置にいるよりもずっと心地よく感じるのだろう。

そして、三階から四階へと下に続く、非常階段の『この場所』から見える景色が、僕は好きだった。

一戸建ての小さな家は僕よりもずっと下にあり、高層マンションは僕よりもずっと上にあった。そして同じ目の高さには近所の小さなデパートの看板と、高級住宅街に並ぶ三階建ての家の屋根。僕の街の全てを見ているような気持ちになった。

サンドイッチを食べ終わった後、コンビニで、ブラックコーヒーを一緒に買えば良かったとまた後悔した。

カフェオレやココアみたいな甘いものよりも、ブラックコーヒーの方が僕の口には良く合う。その理由の大部分は、ただ、甘いものあまり好きではないという単純なことだが、僕が好きな苦い煙草にカフェオレが合わないという理由も、数パーセント入っている。

昼休み終了のチャイムの馬鹿でかい音を聞いて、僕は立ち上がり、制服についた埃を軽く手で払い落として、保健室へと向かった。

僕の情報が正しければ、今日は午前中、保健室の先生は来ないことになっている。早い話し、朝は出張で午後だけ来るのだ。先生が来る前に保健室の自己診断書に適当な時間と症状を書いて、ベッドにもぐりこんでおけば、僕のサボりがばれることはないのだ。

きっと、彼女もいるだろうと思った保健室には、予想通り、一足先に保健室に来ていた秋村さんがいた。

彼女もこの情報を知った上で、腹痛と言い、授業をサボったのだらう。

「また会ったね、隠れ不良の斉藤君」

彼女の顔は、笑っていた。そして、当たり前のように僕を歓迎してくれているようにも思えた。

「お互い様だらう、チューハイ好きの秋村さん」

「私、チューハイよりワインの方が好きなんだけどな」

「ワインもやっぱり、甘口が好きなの？」

「勿論。斉藤君は、辛口派みたいだけどね」

彼女の書いた自己診断書が少しだけ目に入った。綺麗な小さな字

で書かれていた。何て書かれてあるかまでは分からなかったし、分
かりたいと思う気持ちもなかったが、その自己診断書は確かに、僕
のクラスの秋村凜だった。彼女もなかなかの演技者だ。

でも、僕だって負けてはいない。

いつの間にか僕の視界から消えていた秋村さん。きっと、もうベ
ッドで寝ているのだろう。

僕は自己診断書と横においてある鉛筆を手にとって、小さく深呼
吸した後、これでもかという程丁寧な字を連ね、僕のクラスの斉藤
瞬也を作り上げてみせた。後から何回か見返し、失敗がないか調べ
るか、どうやら大丈夫なようだ。僕が作った自己診断書は、完璧な
斉藤瞬也だった。

ベッドの方に向かうと、やっぱり秋村さんは一番左端のベッドで
もう寝ていた。個別のカーテンはついているものの、隣のベッドで
寝るのは多少の抵抗を感じ、三つあるベッドのうちの僕は一番右端
を選んだ。

ベッドに入って約十分。静かな上に、エアコンが完備してある保
健室の温度は最適。そんな居心地の良い保健室で、いい具合にうと
うとしてきた僕の目を覚まさせたのは、五時間目開始のチャイムの
音だった。耳障りなほど大きな音を鳴らすチャイムは、いい加減邪
魔だ。時刻を知らせるだけなら、もう少し音量を小さくしたって構
わないだろう。この無駄なほどの大音量はやめて欲しい。

布団をかぶったまま、溜息を吐いた僕。

そしてまた、シンと静まり返る保健室。

そつと耳を澄ますと、かすかに聞こえる規則正しい小さな寝息。

どうやら秋村さんは既に熟睡しているらしい。

僕も早く寝よう。そう思えば思うほど寝られなくなってしまふの
は、僕のおかしな心理で、どうにかして欲しいもの。けれど、これ
が生憎、そう願ったところでどうにかなるものではなかった。

寝られないまま、どれくらい時間が過ぎたのだろう。僕の中の
時計では、既に三十分といったところだ。

音を立てながら開いた、保健室のドア。

そして次に聞こえたのは上靴ではなく、スリッパの音。保健室の先生がきたのだろう。僕たちが書いた完璧な自己診断書を手に取るときだろうか、紙を扱うような物音が少し聞こえた。

やっぱり早く寝よう。

心の中でそう言っ、目を閉じる僕。保健室の先生が嫌いなわけではないけれど、基本的に関わりのない人間であり、そういう人と会話することは、僕にとって苦痛でしかなかった。寝ていれば話しかけることもないだろう。

その後、眠りにつくことが出来た僕が次に起きたのは、放課後だった。

そつえば鞆をとりにつかないと、なんて冷静に考えられている僕の頭は、寝起きだつてちゃんと正常に動いているはずだった。

なのに、ベッドの周りを囲むカーテンを開いて、秋村さんがいないことに不安を感じた僕は、やっぱり寝起きで、どこかおかしいところがあるらしい。さっき、非常階段から彼女がいなくなっていたときは、あんなに安心したのに。

「良く寝ていたわね。気分はどう？」

「平気です」

保健室の先生の優しい言葉は、軽くかわした。

「はい、これ担任の先生に渡してね」

「ありがとうございます」

判子が押された自己診断書を受け取って、小さくお辞儀した後、僕は保健室を出た。教室に行く前に職員室により、松本先生に自己診断書を渡すと、また、心配された。

その心配が、煩わしくて、それから少しの罪悪感。

時間を確認すると、もう全ての授業が終わって一時間が経とうとしていた。流石に教室には誰もいないだろうと安心する僕をよそに教室に近づくにつれ、小さな声が聞こえてきた。数名の女子が残っているらしい。

廊下を歩きながら溜息交じりの呼吸をする。僕が一步進むたびに声は近づいていく。そして、ふと耳に入った言葉に一瞬でも足を止める僕が、僕自身、不思議で仕方がなかった。

「そっか、凜ちゃんやっぱり転校しちゃうんだ」

「うん。ごめんね、朋ちゃん」

「ううん、凜ちゃんが謝ることじゃないよ。そんなに遠い距離じゃないから、また遊べるしね。高校は同じところ行けるかもしれないし！」

僕の記憶が正しければ、クラスの中に凜という名前がつくのは、秋村さんだけだった。そして、返事をする声は、確かに秋村さんの声だった。朋という呼び名から連想されるもう一人の声は伊藤さん。大方、保健室に行った秋村さんを待っていたのだろう。

止めた足を、すぐに進め始める僕。

何の躊躇もなく、ドアを開けると、四つの瞳が僕を見る。

「あ、斉藤君、これから帰るの？」

「うん」

「バイバイ、斉藤君」

穏やかに微笑みながら小さく手を振る伊藤さんの目は、少しだけ赤くなっていた。秋村さんの転校のことで泣いたのだろう。

「バイバイ」

秋村さんも、また、同じように小さく手を振った。

その表情はどことなく、寂しげで悲しげで、申し訳なさそう。どうせ振りだと思ったけれど、何故だか、演技をしているようには見えなかった。

「うん、バイバイ」

僕は手も振らずに、声だけでそう返事をした。それから、小さな微笑も作って。

少しだけ、苛々した。

なんだかんだ言って、僕は、彼女が羨ましかったのかもしれない。僕と同じように、全てが演技だと思っていた秋村さんが、僕の知ら

ないところで、あんな風に作っていない表情を持っていることに、嫉妬しているのだ。

それから、転校という言葉に、どこかスッキリしないものを感じていた。多分、伊藤さんのような純粋な。寂しいという感情とは違うのだろう。悲しいという感情だって無いと言い切れる。でも、どこか引っかかる感覚。

それ以上、考えるのはやめた。こんなことに悩んだって、無駄なだけだ。

僕はいつもよりも早足気味で帰り道を歩いた。

秋村さんの転校の話は、翌週の月曜日、帰りのショートホームルームで松本先生から発表された。

「えー、知っている奴もいるかもしれないが、今週いっぱい、秋村が家の事情で転校することになった」

ザワザワと騒ぎ出すクラスメイトたち。

「凜ちゃんってば、言ってくれたらよかったのにー」

「どこに転校するの？」

どうやら、伊藤さん以外の子達に、転校のことは告げてなかったようだ。理由ははっきりとしていた。彼女が表面上関わりを持っていた生徒は、伊藤さんだけなのだから。裏では僕のように関わりを持った生徒がいたかもしれないけれど、そこは当たり前のように皆隠し通していた。

女子も男子も、おしゃべりに夢中になる中、僕は何事もないかのように、平然としていた。それもそのはず。僕はこの事実を前から知っていたし、たった一人クラスメイトが転校することが、僕の人生に与える影響は本当に小さいのだから。第一、クラスで一人ぐらい、転校する奴がいてもおかしくはないだろう。在り来りな別れ。特別なことは何も無い。

後ろのほうで、蚊の泣くような声で聞こえた、すすり泣く声。そっと振り返って見てみると、一番後ろの席で、伊藤さんが俯いて鼻をすすっていた。周りの騒がしさに負けて、気づいているのは

僕と、秋村さんだけのようだった。

松本先生に話しによれば、転校と言ってもどこか遠くの、名前も知らないような街に転校するのではなく、僕らの住んでいるところから自転車で三十分ほど走らせたところらしい。高校も地区が一緒だから同じところになる可能性がある。僕も何回か行ったことがある街で、この辺りより、少し都会だけれど、そう雰囲気も変わらない場所だ。

放課後、僕は非常階段へと向かった。

今日は母の友達が家に来ている。出来れば会いたくない。本当は教室で本でも読んでいるつもりだったが、秋村さんの転校の話題で、クラスにはまだ沢山の生徒が残っていた。勿論、話題の中心である秋村さんもその中の一人だ。そんな教室で本を読むのは避けたい。図書室という選択肢もあったが、月曜日は休館。結局、非常階段の『この場所』で暇を潰すことにしたのだ。

昼休みは毎日いるが、放課後の非常階段は久しぶりだった。

『この場所』に座って、鞆から本を取り出す。最近マイブームの作家の新作で、昨日購入したばかりのもの。残りは三分の一といったところだ。希望としては、今日中に読み終えたい。

読み始めてから、一時間半ほど経ったころだろう。クライマックスが近づいてきて、本の盛り上がりがピークに達したところだ。背後から人の気配を感じて振り返った、と同時に秋村さんが、階段を降りてきた。

「ここ、好きなんだね」

「秋村さんもね」

彼女は僕を通り過ぎて、踊り場へと出た。四階から三階へと下に続く非常階段の『この場所』は、いつしか僕と秋村さん、二人の所有物のようになっていて、それが少しの優越感を感じさせて気分が良かった。

腕時計をちらつと見ると、もうすぐ五時半になる。『この場所』は西側。夕焼けを見てから帰ろう、と声には出さず、心の中で決め

てすぐのことだった。彼女が話し始めた。

「本当は、夏休みに転校するはずだったの」

二ヶ月以上も前から、転校のことは決まっていたということだ。

そういえば、あのときの伊藤さんの言葉には、やっぱり、という単語が付いていた。やっぱり転校しちゃうんだ、と言ったということは、前から可能性があるのと知っていたということ。辻褄があう。

「でも、結局、色々なことが曖昧なまま夏休みは終わっちゃって…

…、今更になつて転校だなんて、ずるいよね」

さすがに、寂しいのだろう。そんな感じがした。

「さつき、朋ちゃんに言われたんだ。空はどこまでも繋がっているから一人じゃないよ、って」

伊藤さんらしい、純粋な考え方だと思った。

僕は何も言わずに、秋村さんの次の言葉を待った。読んでいた本は、しおりを挟んで閉じた。

「そんなの、偽善だよ。ただの綺麗事」

苛々しているようで、少し怒っているようで、それでも悲しそうな声が、僕の中の何かを動かす原動力となつたらしい。僕は、自然なほど自然に、無意識に、言葉を発した。

「でも、そんな綺麗事に、救われているくせに」

彼女は僕の言葉に返事を返さなかった。

「秋村さん、本当は寂しいんだよ。伊藤さんと離れること。だから本当は、凄く嬉しかったんじゃないの？」

彼女は何も言い返さなかった。

少しずつ、赤色に染まっていく景色。太陽は、少しの音も立てずに、それでも確実に、落ちていった。

そんな夕焼けを秋村さんと二人で『この場所』から見ていて、なんとなく、思ったことがある。

僕らに言葉は必要ない、と言っている人たちに限って、思いが通じ合っていないのではないかな。大切なのは、偽善でも、綺麗事でも、何でも言葉にして伝えるということ。言葉にして言わなければ伝わ

らないことが、この世にはたくさんあって、そういうことに限って、何よりも伝えたいことだったりするのだ。

自分の伝えたいことを言葉にすること、そんな単純なことから僕らは逃げている臆病者なのではないかという気がした。

でも、『この場所』から見える夕焼けの美しさを言葉で伝えるのは難しすぎて、そんなことはできっこないだろう。

けれど、今僕が何かを心配する必要はない。

一番この夕焼けを伝えたいと思う人は、僕と一緒にこの夕焼けを見たのだから。

だから、この夕焼けよりも、もっとストレートな言葉をぶつけてみよう。

「伊藤さんが、大切なんでしょ？ このままでいいの？ 素直になれば、今よりもずっと素敵に伊藤さんと別れられるよ」

太陽が完全に沈みきつて、薄暗くなってきたころだった。

「……朋ちゃんの家、行ってくる」

秋村さんはそう言つて非常階段から出て行った。

残った僕は、煙草を取り出し、火をつけた。

先週、秋村さんと『この場所』で出会って、まだ一週間ほど。なのに、僕は、彼女のことが気になっていて、でもそれは僕が知っている限りの恋ではなくて、友情というわけでもない。

ただ、なんとなく似ている僕らが、なんとなく磁石のように引き合っただけ。理由は単純に、僕がS極で、彼女がN極だっただけのこと。それだけのことに運命を感じた僕は、少し、寝ぼけているのかもしれない。

些細なきっかけが、突然の出会いへ。

在り来りなきっかけが、突然の別れへ。

この、とんでもなく濃い一週間が、今まで過ごした二年半の中学校生活の中で、一番の思い出なのかもしれない。

僕は、この一週間をひとつのストーリーとして思い返しながら、『この場所』でひとり、煙草を吹かし続けた。既に空は、闇だった。

その週の金曜日の最後のホームルームで、秋村さんは僕らクラスメイトに短い挨拶を残し、この学校から去って行った。

秋村さんは、どこか堂々としていた。

僕と彼女が、あの日以来会話を交わすことはなかった。交わす必要がなくなっただけからだ。

僕の平凡な毎日が戻った。無論、彼女との一週間が平凡でなかったわけではないが、少しだけでも、僕に変化をもたらしたのは事実だろう。

それでも僕はやっぱり、お酒も飲むし、煙草も吸う。先生やクラスメイトの前では猫をかぶるし、優等生をやっている。それじゃあ、何が違うのか。

それは多分、形的なものではなくて、もっと感情的な何かなのだと僕は勝手に思うことにした。

そういえば余談だけれども、煙草の異称のひとつに、相思草というものがある。江戸時代の風習がどうたらこうたらと、色々と言説はあるけれども、そんな理屈よりも、僕の勝手な考えを紹介しておくことにする。

僕らは煙草を吸うということで、ひとつのストーリーを思っているのではないだろうか。どんなストーリーにも相手は必要。だから、相思草。勿論、しつこいようだけれど、これは僕の勝手な考えであって、実際、こんな説はないだろう。

ただ、そう思っていた方が、少しばかり、僕の心の中は綺麗でいれるような気がした。

煙草は僕の体を蝕んでいるのかもしれないが、僕の心は静かに癒してくれているようだった。

そして今日もまた、『この場所』で、僕はひとつのストーリーを背後に、苦い煙草を吹かすのだ。

（後書き）

拙い文章の小説を読んでもいただき、大変有難うございました。
アドバイス、感想など、何かございましたら、
評価していただけたら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7944c/>

相想草 - あいおもいぐさ -

2010年10月8日15時52分発行